九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

新羅・崔致遠と晩唐・顧雲の交遊について

竹村, 則行
九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 教授 : 中国文学

https://doi.org/10.15017/1186

出版情報：文學研究. 100, pp.27-50, 2003-03-31. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

新羅・崔致遠と晩唐・顧雲の交遊について

竹村則行

一　はじめに
二　崔致遠伝をめぐって
三　「檄黄巣書」の文体
四　崔致遠と羅隠の交遊
五　崔致遠と顧雲の交遊
六　まとめ

一　はじめに

「道徳文章、我が東方の第一人」[1]と推称される崔致遠（八五七―?）については、今日、祖国の韓国において、国家的な英雄として許多の研究が蓄積されていることは当然であるが、日本や中国においては、幾つかの優れた先行論著は存在するものの、本格的総合的に研究が着手されているとは言い難いのが現状である。[2]直接の関係が無かっ

た日本における崔致遠研究は、主として日本と関係の深かった新羅史研究の一環として端緒が開かれている面がある。一方、晩唐の詩人顧雲や羅隠との直接の交遊が認められる中国においては、崔致遠の関係資料は、『桂苑筆耕集』の中国本土における長期散佚の影響もあってか、近世を通じて長らく未報告のままであったが、清末以後、『海山仙館叢書』や『四部叢刊』に『桂苑筆耕集』が輯録され、また今日では『全唐詩』佚詩として崔致遠詩が補入されており[3]、研究環境が漸次整いつつあるように見受けられる。

小稿は、これらの先行研究をふまえ、特に中国文学研究の立場から、崔致遠と顧雲や羅隠との交遊に注目して考察し、晩唐と新羅の文人交流のあり方について考察しようとするものである。

二　崔致遠伝をめぐって

崔致遠の伝記については、やや後世になるが、高麗・金富軾『三国史記』[4]巻四六に簡潔に述べるほか、「孤雲先生事蹟」[5]に関連記事を網羅する。近人では今西龍「新羅崔致遠伝」[1]、また今日では周藤吉之「新羅末の文士崔致遠伝」[1]、崔英成『崔致遠の哲学思想』[6]にも「崔致遠年譜」が附せられており、伝記記録の概要はこれらによって把握することができる。

小節は、崔致遠の渡唐および在唐時に関する伝記記事に注目するものであり、その観点から、以下、崔致遠伝において、特に（A）渡唐故事、（B）賓貢試について、問題を絞って分析することにする。なお、小稿の目的である羅隠や顧雲との交遊については、章を改めて論じる。

（A）渡唐紀事について

崔致遠の渡唐については、『桂苑筆耕集』自序に、よく知られた次の証言がある。

臣自年十二、離家西泛。當乘桴之際、亡父誡之曰、十年不第進士、則勿謂吾兒、吾亦不謂有兒。（臣は年十二より、家を離れて西に泛べり。桴に乗るの際に当りて、亡父之に誡めて曰く、十年進士に第せずんば、則ち吾が児と謂ふなかれ、吾もまた児有ると謂はざらんと。）

ここには、まだ童顔十二歳の可愛い我が子を西方の中国へ送り出す厳父崔肩逸のスパルタ魂が見て取れる。この文は、十八年後の崔致遠三十歳、新羅・憲康王への上奏文中に述べられた若年の回想であり、時間の経過による相応の美化を勘案するとしても、厳父の厳命はほぼその通りであったであろう。それにしても、我が子が可愛くない親はいないはずであるが、一体、十二歳の少年の旅中のお世話、旅途の費用、それに中国到着後の生活の面倒は誰が見るのであろうか。そして、「十年で科挙の進士に及第せよ、さもなくば親子の縁を切る」などという激烈な言辞は、何か実現可能な背景があってのものか、或いは、可愛さの余り半狂乱になった親が口にした出任せなのか、今日の映画やドラマ、漫画の一シーンにでも十分使えそうな崔肩逸のこの科白は、どうやらそれが事実らしいだけに一層興味を惹かれる。

結論から先に述べれば、この当時、新羅と大唐とは国家・民間ともにかなり密接な交流があり、崔致遠少年が乗った船も、恐らくはその間を往復する貿易船の一であったと思われる。そして先方の中国には、彼を受け入れる新羅人の強固なネットワークがあり、また、進士及第については、既に崔致遠より以前に賓貢進士となった金可記[7]等の先例もあったのである。崔肩逸はこれらの諸情況を総合的に判断して、まだ童顔の可愛い我が子を中国へ旅に出したのであり、決して無謀に我が子を異邦へと突き放したのではなかったものと思われる。以下、これらの諸問題について、先達の研究に拠りながら、順次論述していきたい。

九世紀前半の東アジア、特に中国と新羅、日本をめぐる文化交流の実態を知ろうとする時、細部の具体記述に乏しい憾みのある『唐書』『資治通鑑』等の公的記録を遙かに凌駕して、我々は、本人が直に記録した第一級の直接資料を有する。それは、八三八年から八四七年に渡る中国旅行の見聞を具に記録した円仁の『入唐求法巡礼行記』[8]である。とりわけ、円仁が山東半島から東海を横断し、新羅沿岸を経由して日本に帰着したのは八四七年の事であり、この時期は、崔致遠が中国に赴いた八六八年を隔たる、僅か二十年ばかり前である。このことからも、円仁の見聞として『入唐求法巡礼行記』中に記された新羅や中国に関する記録は、ほぼそのまま崔致遠と同時代の実状として適用できると考えられる。そして注目されるのは、『入唐求法巡礼行記』において、円仁の見聞として再三に渉って記録された新羅人の海上交通や中国における広範囲にわたる活動の実態である。

まず、今西龍『新羅史研究』所収「慈覚大師入唐求法巡礼行記を読みて」第四節「新羅人の航海術と之に頼りたる日唐の交通」に次の一節がある。

> 唐に於ける新羅人は、南方に於ては楊州の方面より運河に沿ひて北し、楚州を一中心とし、大淮の沿岸に或は更に東北に塩河を以て海州方面に数多居住し、北方に於ては山東半島の根元たる蜜州大珠山より登州乳山に、更に東して半島の東南隅たる赤山に連り、尚ほ半島の東北隅たる成山に及び、赤山は其中心地たりしなり。……新羅人が商人として船舶の所有者として、或は水夫として（農民もありたるべし）多数前記地方に在留せるに、……

また、小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』第一巻四五五頁は次のように述べる。

> 新羅は唐に対して奉朔関係にあり、近隣という地理的関係と相俟ち、使節や留学のための往還は甚だ盛んであった。こうした原因も加わって、新羅人は九世紀における極東海上貿易の担当者となって東シナの海上乃至沿海において華々しい活動を行った。

更に同著第四巻四〇三頁「円仁と新羅人」においては、「新羅人の沿海活動」の項に、

今、新羅の船舶の寄港した山東の沿海の地方名を数えると、登州萊蓬(ママ)県、文登県成山甫・同赤山甫・牟平県盧山・乳山甫・邵山甫、密州諸城県の大朱山駮馬甫・同瑯琊台・海州東海県・泗州漣水県・楚州・揚州・明州・蘇州などがある。こうした新羅人の海上活動はこれに対応してその土地に居留民を定住せしめる結果となったものであって、例えば蘇州・漣水県などにはそれぞれ新羅坊、すなわち居留民区があり、…赤山甫・乳山甫・邵山甫などにもそれぞれ新羅人の部落があり、…

と述べて、唐における新羅人集落の存在を指摘する。

そして、E・O・ライシャワー『円仁　唐代中国への旅』[8]第八章「中国における朝鮮人」にも、以下のような記述があり、中国における新羅人の存在の大きさに注目する。

中国の都の街角を往来する外国人の中に、大勢の朝鮮人たちが混じっていたことは決して驚くにはあたらない。実際、円仁の日記と他の多くの歴史の資料とは、朝鮮人たちがそこに住む外国人の中で最も大勢であり、他の外国人たちよりも徹底して中国の生活に入り込んで、彼ら自身の活動を行っていたという印象を与える。（「宮中の朝鮮人」）

朝鮮人の貿易商社会は山東半島の南岸一帯及び淮河の下流一帯に集中して存在し、それらは合わせると、朝鮮と大唐帝国との中心を結ぶ自然の水路を形成しているのである。中国とその東の隣邦諸国との間の貿易における主なターミナル（終着港）は明らかに楚州であった。…楚州には既に述べたように大きな朝鮮租界があり、朝鮮人の総督（惣官）がいて、朝鮮人地域の行政を司った程、巨大であったのである。（「沿岸の貿易商」）

以上の挙例は、主に円仁の『入唐求法巡礼行記』に記録された中国における新羅人社会の特徴について指摘したものであるが、僅か二十年の時間差からしても、ほぼそのまま、崔致遠の青雲の志を立てた渡唐時の情況に合致す

るものと考えて差し支えないであろう。即ち、当時既に新羅と中国との交流は甚だ盛んであり、船舶による海上貿易ルートや唐における新羅人社会も確立しており、崔致遠の渡唐は、未熟な十二歳という年齢こそ不安があるものの、海上船舶のルートや在唐生活については、既にかなり成熟した受入れネットワークが確立していたことが窺われるのである。では、父親崔肩逸の厳命にあった「十年以内の進士合格」とは、果たしてどれだけの蓋然性に基づいた発言であったのだろうか。次節において、当時の科挙制における賓貢制度について検討する。

（B）賓貢試について

清・徐松『登科記考』巻二十三、懿宗咸通十五年（八七四）の登科録に、顧雲と並んで崔致遠の名が見える。座主は礼部侍郎裴瓚であった。先の渡唐より六年後、刻苦勉励した崔致遠は、約束を四年も前倒しして、十八歳で見事に厳父の期待に応えたのである。実に『桂苑筆耕集』自序に述べるように、「人百之、己千之」（人の之を百たびするや、己之を千たびす）るほどの猛勉強の賜物であった。

ところで、崔致遠のこの快挙は賓貢による合格であった。賓貢（または賓薦とも）は、外国から推薦された外国籍の貢士に認められた特別の称号である。天子に忠実に仕え、国家の繁栄に寄与する能吏の登用試験として千数百年の長きに亘って整備発達した科挙試は、多くの場合、受験者は漢人であることを前提としたが、賓貢は、例外として友好的な上貢国からも進士合格を認めた特別制度である。従って、賓貢が適用される外国は中国と経済的文化的にも深い交流があることが前提となるが、唐代において、崔致遠の祖国である新羅に賓貢の特待制度が認められることは、その背景に、六六〇年代に両国が連合して、百済や日本、高句麗を撃破して以来続く唐朝と新羅との密接な交流があってのことであることは言うまでもない。

閻文儒『唐代貢挙制度』[9]八四頁に、賓貢について次の記述があり、この引用文の後に顕著な賓貢例として崔致遠に

言及する。

唐代は中国中古封建社会における最盛期であり、当時は四隣各国と政治、文化、経済上の往来が頻繁であった。四隣諸国も続々と役人や留学生を唐に派遣して政治や文化の交流を進め、多くの商人も唐に来て商売をした。彼ら及び彼らの子孫の幾らかが、唐朝の推薦選抜試験に加わり、科挙試に参加してその合格を許されることを要求した。その資格を認められたものを賓貢と称する。

賓貢は特別制度であったためか、本体の科挙史の記述から漏れることが多いが、蒋非非・王小甫等『中韓関係史』(古代巻)[10]一三四頁、「唐に赴いた新羅留学生」は次のように述べる。

唐に学ぶ外国留学生は新羅の学生が最も多かった。彼らは国家による派遣と私的に中国に来た者との両類に分けられる。前者は主に唐の両京（長安・洛陽）国士監所属の各学館に学び、後者も各州県にある官学で勉強した。凡そ官学で学ぶ新羅学生は、皆公費の支給を受けた。唐朝から食糧の支給、宿舎の提供、税や労役の免除を受け、衣食費は鴻臚寺から支給され、書物代は新羅朝から発給された。新羅学生は卒業後、賓貢科の試験を受けられ、合格者は唐での任官ができた。

恐らくは官費留学生ではない、苦学を余儀なくされた私費留学生であったであろう崔致遠が、果たしてここに述べるような留学生優遇措置をどれだけ享受できたのか不明であるが、ここに述べられることが事実であるとすれば、崔致遠が留学した当時は、新羅からの留学生は国家によって手厚く保護されていたし、少なくとも異境にただ一人学ぶ心細さからは免除されていたであろうことが推察される。

『東文選』巻八四所収の崔瀣「送奉使李中父還朝序」によると、

進士取人本盛於唐。長慶初、有金雲卿者、始以新羅賓貢、題名杜師禮牓。由此以至天祐終、凡登賓貢科者五十有八人、五代梁唐又三十有二人。

とあり、唐代の新羅人の賓貢科進士が長慶初年（八二一）の金雲卿を始めとして、晩唐天佑末年（九〇七）に至るまで五十八人に上ることを述べる。この文は、後半において、当然ながら「吾家文昌公」たる栄ある遠祖崔致遠の賓貢の履歴にも言及するのであるが、賓貢試の実態について貴重な指摘がある。それは、

所謂賓貢科者、毎自別試、附名牓尾、不得與諸人齒。所除多卑冗、或便放歸。（所謂賓貢科なる者は、別試あるごとに、名を牓尾に附し、諸人と齒ぶことを得ず。除せらるる所も卑冗多く、或いは便ち放帰せしめらる。）

つまり、特別試験である賓貢科は、通常の正科の進士合格者と全く同列の扱いではなく、仮に任官しても卑職であり、帰国する者も多かったというのである。賓貢を、中国へ上貢する諸外国に対する一種の懐柔策と考えれば、主催者の中国が自国に学ぶ外国人留学生に対してこのような形式上の栄冠（名誉称号）のみを賦与し、中国の内政に深く関わる官吏としての実質を与えなかったことは理解できないことではない。この他、引用は省略するが、楊昭全・韓俊光『中朝関係簡史』[11]八四～九一頁にも、来唐の新羅留学生のほか、僧侶・商人・農民を含めて、唐ー新羅の国際交流について叙述する。

さて、自らも深く関わった賓貢に関する崔致遠の発言を『桂苑筆耕集』に求めると、断片的ながら、『桂苑筆耕集』巻十八「前湖南観察巡官裴瓊啓」[12]に以下の記述がある。

但緣既忝門生、豈論賓貢。鴛鸞之與螻蟻、感恩皆同、多士之與遠人、報徳何異。（但だ既に門生たるを忝くするに縁りて、豈に賓貢たるを論ぜんや。鴛鸞の螻蟻に与かるや、恩を感ずるは皆同じく、多士の遠人に与かるや、徳に報いるに何ぞ異ならん。）

ここで崔致遠は、正規の進士と外来の賓貢たる自分を鴛鸞（高貴な鳥）と螻蟻（虫けら）、或いは多士と遠人の評語で対比し、賓貢生たる自分を卑下しながら、恩徳では決して負けない自負を示す。ここに崔致遠が自ら言及する賓貢は、先に挙げた崔瀣「送奉使李中父還朝序」の論調と軌を一にするものであり、外国人留学生としての賓貢合

格が確かに大変な名誉であることは間違いないとしても、所詮は「化外の民」に対する唐朝の特別の恩典でしかなかったことを物語るものである。

三　「檄黄巣書」の文体

やがて淮南節度使高駢の幕下に入った崔致遠は、時に猖獗を極めていた黄巣の乱の鎮静化をねらって、「広明二（八八一）年七月八日」の日付を有する檄文「檄黄巣書」を代作する。全文九六六字から成るこの長大な檄文を、小稿で全部は紹介できないが、崔致遠の代表的な四六文の特徴を論ずるために、いま全体の約六分の一に当たる一三二字から成る本文第一段の導入部について、四六の対句のまとまり毎に引用すれば、次の通りである。

夫守正修常曰道、臨危制變曰權。（夫（そ）れ、生を守り常を修めるを道と曰ひ、危に臨んで変を制するを権と曰ふ）
智者成之於順時、愚者敗之於逆理。（智者は之を順時に成し、愚者は之を逆理に敗る）
然則、雖百年繫命、生死難期、而萬事主心、是非可辨。（然れば則ち、百年命を繫ぐに、生死は期し難きと雖も、而るに万事心を主にすれば、是非弁（わか）つべし）
今我以王師則有征無戰、軍政則先惠後誅。（今、我れ王師を以てすれば則ち征有りて戦う無く、軍政は則ち恵を先にして誅を後にす）
將期尅復上京、固且敷陳大信、敬承善論、用戢奸謀。（将に上京を尅復するを期せんとすれば、固より且（まさ）に大信を敷き陳べ、敬しんで善論を承け、用て奸謀を戢（おさ）めんとす）

且汝素是遐甿、驟爲勁敵、偶因乘勢、輒敢亂常。（且つ汝は素より遐甿にして、驟かに勁敵と為り、偶ま勢に乗るに因りて、輒ち敢て常を乱さんとす）

遂乃包藏禍心、竊弄神器、侵凌城闕、穢黷宮闈。（遂に乃ち、禍心を包蔵して、神器を窃み弄び、城闕を侵凌して、宮闈を穢黷さんとす）

既當罪極滔天、必見敗深塗地。（既に当に罪極まりて天に滔すれば、必ずや敗るること塗地に深きを見ん）

ここで崔致遠は、典型的な四六文を駆使しつつ、「王師」即ち皇朝の軍隊が正道に則って黄巣の奸敵を征伐するのであるから、勝敗は自明であることについて、諄々と説き起こす。紙幅の関係もあって全文は紹介できないが、以下第六段までの段落と概要は、筆者の見るところ次のようである。（冒頭の「廣明二年七月八日、諸道都統検校太尉某、告黄巣」および末尾「某告」の計二二字を省く。）

第二段　「噫、唐虞已降、苗扈弗賓　～　縱饒假氣遊魂、早合亡神奪魄」一七五字

ここでは、古来から近年に至る叛賊を引き合いに出し、いずれも成功した例は無いことを述べる。

第三段　「凡爲人事、莫若自知　～　厚其凶悪、而降之罰」一九九字

ここでは、我が国家には恩徳があり、叛乱が長く続いた例は無いことを、「道徳経」や「左伝」を引用して述べる。

第四段　「今汝、藏奸匿暴、悪積禍盈　～　尅期旬朔、但以好生悪殺」一八一字

ここでは、黄巣軍が脆弱であり、一旦戦闘になれば、我が軍が圧勝するであろうことを誇らしげに述べる。

第五段　「上帝深仁、屈法申恩　～　早須相報、無用見疑」一一四字

ここでは、我が皇帝は仁徳が深く、賊軍も大切に取り扱うであろうことを述べ、黄巣の降伏を慫慂する。

第六段　「我、命戴皇天、信資白水　～　無執、愚夫之慮、坐守狐疑」一四三字

この最終段では、以上の叙述を総括し、「叛して滅亡する」か、「順じて栄貴をたもつ」か、早急に賢明な判断を下すように黄巣軍に迫っている。

以上には、崔致遠が高駢に代わって黄巣に告げた檄文のうち、導入部と第六段までの概要を掲げたが、果たして叛乱の現場における効果のほどは如何であったろうか。檄文については、既に劉勰『文心彫龍』檄移篇に分析があり、そこには、

凡檄之大體、或述此休明、或敘彼苛虐、指天時、審人事、算彊弱、角權勢～（およそ檄文の総体的な様式としては、わが方の輝かしき明徳を述べて、敵の残虐無道ぶりを書きたて、天命の摂理を指摘して、人間社会の動きを明らかにし、彼我の強弱を検討して、勢力を比較する。(13)）

と述べる。ここに検討した崔致遠の「檄黄巣書」も、見事に『文心雕龍』の指南通りに叙述されており、彼が『文心雕龍』はもとより、『文選』巻四十四所収の陳琳「為袁紹檄豫州」を始めとする諸種の檄文を熟読していたであろうことが推察される。崔致遠のこの檄文は、いわば教科書通りによく出来た檄文の佳作といってよく、崔致遠の残存する文章の中でも情熱のこもった代表作に数えられるであろう。残念ながら、戦乱の現場は一篇の檄文でもって戦局が変わるほど容易なものではなく、折角の崔致遠代作による高駢の檄文も、その後に顕著な戦果が見られないことからすると、さほど芳しい成果が挙げられなかったものと思われる。但し、対敵の戦局においては効果が薄かったとしても、対内、つまり味方内には大きな成果があったに違いない。それは、高駢および顧雲を含む皇朝軍において、華麗な戦時文書を認める新羅人崔致遠の評価が一段と高まり、そして確定したと考えられるからである。

四　崔致遠と羅隠の交遊

羅隠（八三三―九〇九）は字は昭諫、餘杭の人。詩もて天下に名あり、尤も詠史に長ず。然れども譏諷する所多きを以ての故に、第に中らず（『旧五代史』巻二十四）。

羅隠の伝記は、ここに挙げた『旧五代史』のほか、『旧唐書』巻一八一、『五代史補』巻一、『呉越備史』巻一、『唐才子伝』巻九、『十国春秋』巻八四等に見えるが、いずれも一面的断片的であり、その全体像の把握は容易ではない。ここでは、崔致遠との関係について見るために、その性格および科挙試について確認しておきたい。『五代史補』の次の記事は、比較的明確に羅隠の性格と科挙との因果を指摘する。

羅隠在科場、恃才傲物、尤爲公卿所悪、故六舉不第。（羅隠は科場に在りて、才を恃み物を傲り、尤も公卿の悪む所と為る。故に六たび挙げらるるも第せず）

つまり羅隠は、生来の傲岸不遜が祟って、推薦者たる公卿に嫌悪され、科挙試に次々に失敗したというのである。後世の明・田汝成『西湖遊覧志餘』にも、羅隠について「性傲睨」という評語があり、どうやら羅隠は、官僚社会にあって、周囲との調和を欠くが故に、官途にかなりの曲折があったと推察される。『呉越備史』には、「隠は本名は横、凡そ十たび上げらるるも第に中らず。遂に名を更む。」とあり、本名は羅横だったものを、度々の落第のために羅隠に改名したものだという。どうやら羅隠はその名の如く、「横しまで隠かった」ようである。更に『唐才子伝』には、「乾符初、進士に挙げらるるも、累ねて第せず」という語が見える。もしこの時に幸いに羅隠が登科を果たしていたら、羅隠と顧雲、それに崔致遠は同年の進士として、更に深い生涯の契りを結んでいたであろうが、この記事の信憑性が今一つ確かでないのが残念である。それにしても、この記事は羅隠、顧雲、崔致遠の三者が同時代人であることを示し、もし内容が事実だとすれば、羅隠の落第があったとしても、咸通十五年即ち乾符初年（八七四）

の科挙試は、三者の交遊が深まる大きな契機になったのではないかと思われるのである。

ここには、羅隠が自らの科挙落第を詠んだ「下第作」詩を、『羅隠集』[14]によって掲げる。

年年模様一般般　年年　模様　一般般たり
何似東歸把釣竿　東帰して釣竿を把るに何似(いかん)？
巖谷謾勞思雨露　巖谷は　謾(みだ)りに雨露を思うを労し
彩雲終是逐鵷鸞　彩雲は　終に是れ鵷鸞を逐う
塵迷魏闕身應老　塵も て魏闕に迷へば　身応に老いん
水到呉門葉欲殘　水　呉門に到りて　葉残(くず)れんと欲す
至竟才多[15]也須達　至竟　才多きも須らく達すべく
不能長與世人看　長く世人に与(くみ)して看る能はず

ここには、落第の憂き目に遭って、隠遁を夢想したり、近い将来の栄達を誓う羅隠の傷心ぶりが顕わである。

さて、その羅隠と崔致遠との交往を示す資料は羅隠側には無く、わずかに高麗・金富軾『三国史記』巻四十六に載せる崔致遠伝に次のように見える。

始西遊時、與江東詩人羅隠相知。隠負才自高、不輕許可、人示致遠所製歌詞五軸。

この文は文意にやや不可解な点があるが、『崔文昌侯全集』所収「孤雲先生事蹟」[5]に引く崔致遠伝の記事は、文意がより明確である。

始西遊時、與江東詩人羅隠相知。隠負自高、不輕許可人。人示以公所製歌詞五軸、隠乃歎賞。（始め西遊する時、

江東詩人羅隠と相知る。隠は《才を》負(たの)んで自ら高くし、軽がろしくは人を許可せず。人示すに公の製する所の歌詞五軸を以てするに、隠即ち歎賞す。）

即ち、崔致遠が初めて羅隠と相知ったとき、自ら高く持していた羅隠はなかなか他人と接触しなかったが、人が崔致遠の歌詞五軸を贈ると、羅隠はその才能に嘆賞したという。これは断片的な記事であるが、「負才自高」とする羅隠の描写は先の伝記記述とも一致しており、記事の信憑性は高いと思われる。では、かの羅隠をも歎賞せしめた崔致遠の「歌詞五軸」とは何であったのか、甚だ興味を惹かれるが、残念ながらそのことに言及した記事は、崔致遠の資料からは見つからない。この羅隠は、次章に述べるように、顧雲の詩友でもあったのであり、顧雲と羅隠には親しい交遊を示す数多くの詩文が見られる。顧雲と崔致遠は科挙の同年として、生涯の親しい交わりを結んだが、羅隠と崔致遠の交往を示す資料が乏しいことは、必ずしも二人の交遊が稀薄であったことにはならないであろう。

五　崔致遠と顧雲の交遊

顧雲は字は垂象、池州の人。咸通十五年（八七三）の進士、即ち崔致遠と同年であり、両者は共に高駢の幕下にあって、その公文書の多くを起草した。崔致遠の在唐十六年のうち、進士及第後の十年間、最も親しく交遊したのは顧雲であった。顧雲詩は『全唐詩』巻六三七に輯録する外、『貴池先哲遺書』[16]第五にその詩文がまとめられており、また近年の『全唐詩補編』[17]中の「全唐詩続拾」巻三十四には、顧雲が崔致遠に送った詩が輯録されている。

崔致遠が同僚としての顧雲の文才を賞賛する記事は、司徒相公に「七言紀徳詩三十首」を献上した書状「獻詩啓」[18]に見える。

某竊覽同年顧雲校書、献相公長啓一首、短歌十篇、學派則鯨噴海涛、詞鋒則劍倚雲漢、備為贊頌、永可流傳。

如某者、跡自外方、藝唯下品、雖儒宮慕善、毎嘗窺顔・冉之牆、而筆陣爭雄、未得摩曹・劉之壘。（某、窃かに同年の顧雲校書の相公に献ずる長啓一首、短歌十篇を覧るに、学派は鯨の海涛を噴するがごとく、詞鋒は剣の雲漢に倚るがごとく、備に賛頌を為し、永く流伝すべし。某の如きは、跡は外方よりし、芸は唯だ下品にして、儒宮に善を慕うと雖も、毎嘗に顔（淵）・冉（伯牛）の牆を窺ひ、而して筆陣の雄を争ふも、未だ曹（植）・劉（禎）の塁を摩するを得ず。）

ここで崔致遠は、自らを「外方」の新羅から来た粗野な文人と卑下する一方で、同年の顧雲が司徒相公に呈上した長文の書状と短詩十篇について、「学識が潮吹く鯨のように溢れ、筆鋒は虚空を切る剣のように鋭い。賛辞を尽くしており、後世永く伝わるであろう。」と賞賛する。皮肉にも、この顧雲の詩文は散佚し、一方の崔致遠の「献詩啓」及び「七言紀徳詩三十詩」のみが後世に流伝することになったが、ここには、崔致遠から見た顧雲の才識が生き生きと表現されており、同時代人による顧雲評価と見なすことができる。

次に、顧雲が崔致遠を送った二篇の送別詩について考察し、崔致遠の号（一に字に作る）の「孤雲」と顧雲の関係について考察してみたい。

『三国史記』巻四六の崔致遠伝に、崔致遠がいよいよ新羅へ帰国しようとする時に、同僚の親友顧雲が送った送別詩として、次の詩を載せる。

我聞海上三金鼇　我聞く　海上に三の金鼇ありて
金鼇頭戴山高高　金鼇　頭に戴くは　山の高きがごとく高しと
山之上兮　珠宮貝闕黄金殿　山の上には　珠宮・貝闕・黄金の殿あり
山之下兮　千里萬里之洪濤　山の下には　千里万里の波涛

傍邊一點鷄林碧　傍辺の一点　鶏林碧にして
鼇山孕秀生奇特　鼇山　秀を孕んで　奇特を生ず
十二乘舩渡海來　十二　船に乗って　海を渡って来たり
文章感動中華國　文章　中華の国を感動せしむ
十八横行戰詞苑　十八　横行(ほしいまま)に詞苑に戦い
一箭射破金門策　一箭にて　金門の策を射とめたり

ここには、南方の民歌風に「兮」字を用いつつ、古代東方の神話の設定を借りて、金鼇の鶏林（朝鮮）に生まれた秀才の崔致遠が、十二歳で渡唐し、文才でもって名声をあらわし、十八歳、一箭で見事に進士及第を射止めたことを賞賛する。兮字や神話の援用は、顧雲の長年の知友たる崔致遠に対する親しみを示したものであろう。引用末尾「一箭射破金門策」とは、自ら苦い科挙落第の経験を持つ顧雲[19]としては、それが賓貢によるものとしても、何とも羨ましい異国の秀才の快挙であったと考えられる。『三国史記』本伝の引用は以上が全てであるが、送別詩としては、この後の中段に続くであろう十年にわたる高駢幕下の同僚としての崔致遠の活躍、そして末尾に欠かせぬ帰途や帰国後への配慮の叙述が欠落しており、或いは引用部分は全詩の導入部のみが残存したものであろうか。ほぼ四百年後の十二世紀に成った『三国史記』が用いた資料の詳細は不明であるが、この詩には、親友の帰国を送る顧雲の真情が直截に語られており、顧雲の佚詩である可能性は高いと思われる。

続いて、『三国史記』よりやや後に成った高麗・李仁老『破閑集』巻中の崔致遠伝に、次のように謂う。

及還郷、同年顧雲賦孤雲篇以送之云、（郷に還るに及び、同年の顧雲、「孤雲篇」を賦して以て之を送りて云う）

因風離海上　風に因りて海上を離れ
伴月到人間　月を伴ひて　人間に到る
徘徊不可住　徘徊して　住むべからず
漠漠又東還　漠漠として　又東に還る

ここには、東方海上の仙境（蓬萊山）から人間世界に降りた仙人が、やがて地上に止まることなく東方に還り行くさまを諧謔的に述べる。詩風は先の送別詩と同様であり、帰国間際の崔致遠に送ったものと考えられる。仙人たる崔致遠が地上（中華）に居られなくなった最大の原因は、黄巣の乱に伴う高駢の失脚であった。パトロンの支持を失った崔致遠は、中国の政治混乱を目の当たりにし、望郷の念に駆られ、帰国の意思を鮮明にしたものであろう。

ところで、晩年の崔致遠が「孤雲」と号するのは、顧雲と崔致遠の中国での十年にわたる深い交流、とりわけ崔致遠の帰国時に送ったこの顧雲の「孤雲篇」に直接に起因すると考えられる。顧雲の「孤雲篇」は崔致遠を東海の仙人に喩え、中華の俗世「人間」にしばし「徘徊」して後、やがて元の東海へ帰還することを、「孤雲」に託して戯れに詠んだものである。中華の顧雲からすれば、東海の彼方から来て、また東海に帰ってゆく新羅の才人崔致遠は、正しく東海に浮かぶ蓬萊宮中の仙人であると見なされていたものと思われる。

また、『孤雲先生続集』所収の「和顧雲支使暮春即事」[20]（顧雲支使の「暮春即事」に和す）詩は、崔致遠が顧雲の「暮春即事」詩（不詳）に和韻して次のように述べる。

東風遍閲萬般香　東風遍く閲して　万般香る
意緒偏饒柳帯長　意緒は偏へに饒にして　柳は長きを帯びたり

蘇武書廻深塞盡　蘇武の書は　深塞を廻りて尽き
莊周夢趁落花忙　荘周は夢に　落花を趁ひて忙しからん
好馮殘景朝朝醉　好し　残景に馮りて　朝朝酔はんとするも
難把離心寸寸量　離心をば　寸寸量り難し
正是浴沂時節也　正に是れ　沂に浴する時節にして
舊遊魂斷白雲鄉　旧遊　魂は断ゆ　白雲の郷

「浴沂」は『論語』先進篇に見える自由な野外散策の境地を述べた語。この詩の背景は不詳である。想像を逞しくすれば、新羅へ帰国した崔致遠の下へ、曽て中国で共に高駢幕下の同僚であった顧雲からの書信が、恰も落花の時節にはるばる届き、それに顧雲の「暮春即事」詩が添えられていたのに感動して、崔致遠が和韻した返歌として詠まれたものであろうか。第三句「蘇武」「深塞」とは新羅の辺塞に帰った崔致遠自身の謂いであろうし、第四句「莊周」とは中華の顧雲を指すらしく思われる。顧雲の原「暮春即事」詩が不明な今は詳細は分からないが、第八句の結びにおいて、崔致遠が顧雲との中国での「旧遊」を回顧して、「白雲の郷」の遊山を思えば「魂は断」えんとすと回顧するのは、二人の交遊が白雲漂う隠者の里への「旧遊」であったことを物語る。顧雲、崔致遠共に残存する詩文が一部分しかなく、証明する資料に乏しいのがもどかしいが、「雲」「白雲」「孤雲」等の詩語は、いずれも隠遁や仙人の縁語として用いられるものである。唐代に限らず、歴代の文人間において、或いは実際に隠遁生活を実施しないまでも、一種の理想郷として「白雲」郷での隠遁生活を夢想することは、いわば普遍的な現象であると考えられる。ここに挙げた顧雲が崔致遠の帰国を挟んで送った二篇の詩、また崔致遠が遠く中国の顧雲との交遊を懐かしく回顧した詩には、両者の親近の情が如実に現れている。以上の挙例は断片的なものではあるが、これらの事情を

総合して考えれば、崔致遠は、顧雲の厚情を忘れることなく、帰国時に顧雲から送られた「孤雲」を自分の号として、生涯名のることになったものと考えて差し支えないように筆者には思われるのである。(21)

六　まとめ

伝存する最初の韓国人別集として名高い『桂苑筆耕集』二十巻は、八八五年、それまでの十七年に及ぶ在唐生活を終えて祖国新羅に帰国した崔致遠が、翌年、時の憲康王に進上したものと考えられ、中には高駢幕下での公文書の代作を多く含む。時に崔致遠三十歳、この文集は恐らく異国で物心共に多くの援助を受けたであろう祖国新羅国に対する留学報告書の性格を持つと同時に、中国で身につけた自分の漢文能力を示すことによって、祖国での新たな待遇を求める就職活動の側面をも併せ持つものである。幸いにその後の崔致遠は中国での経験が周囲にも高く評価され、没年こそ分からないものの、今日に至る尊敬をかちえて五十数年の生涯を終えたようである。

ところで、この時崔致遠が憲康王に奉じたとされる詩文は「雑詩・賦及び表奏集二十八巻」である（『桂苑筆耕集』自序）。自序によれば、その細目は次の通りである。

私試今体賦五首一巻
五言七言今体詩共一百首一巻
雑詩賦共三十首一巻
中山覆簣集一部五巻
桂苑筆耕集一部二十巻

このそれぞれに崔致遠自身の説明があるので、以下に引用する。

此時諷詠情性、寓物名篇、曰賦、曰詩、幾溢箱篋。但以童子篆刻、壮夫所慙。及忝得魚、皆爲棄物。（此の時《引用者注：科挙合格時》情性を諷詠し、物に寓して篇を名づけて、曰く賦、曰く詩、幾んど箱篋に溢れんとす。但だ以(おも)へらく童子の篆刻にして、壮夫の慙じる所なりと。魚を得るを忝なくするに及び、皆棄物と為せり。）

この部分は、崔致遠が上奏した詩文の目録以前に棄却した詩文の説明である。つまり、崔致遠は賓貢科合格時に、それ以前に折りに触れて詠んだ詩賦が箱に溢れるほどであったが、いずれも未熟な習作として、科挙合格を契機に全て棄ててしまったという。

尋以浪跡東都、筆作飯嚢、遂有賦五首、詩一百首、雑詩賦三十首、共成三篇。（尋(つ)いで東都に浪跡し、筆もて飯嚢と作し、遂に賦五首、詩一百首、雑詩賦三十首有りて共に三篇を成す。）

賓貢科に及第した崔致遠は、東都洛陽で任官の命を待つ。ここに崔致遠が述べる詩・賦は、この間に認められたものと思われるが、残念ながら残存せず、その内容は不明である。ただ、奉呈の細目に「私試今体賦」とあるところからすれば、科挙試に出題される詩や賦に対する崔致遠自身の予想模擬答案であったことが推察される。これより約七十年ほど前、同様に科挙対策として作成した白居易の出題予想模擬答案が、幸いに『白氏文集』巻二十一、詩賦[22]に伝存することは理解の助けになるであろう。実際に崔致遠はこの後、新たに博学宏詞科の受験を目指すが、資金が底をついて途中で断念を余儀なくされている。

爾後調授宣州溧水縣尉。祿厚官閑、飽食終日、仕優則學、免擲寸陰。公私所爲、有集五巻、益勵爲山之志。爰標覆簣之名、地號中山、遂冠其首。（而後、調されて宣州溧水県尉を授けらる。祿厚く官は閑にして、飽食すること終日、仕優(ろくあつ)ければ即ち学び、寸陰を擲するを免る。公私為す所、集五巻、益ます励みて山を為すの志有り。

爰に覆簣の名を標し、地を中山と号すれば、遂に其の首に冠す。）

この記述によれば、「中山覆簣集」五巻は、溧水県尉であった崔致遠が、閑職と厚遇を利用して一年余りの間に認めた公私の文集である。中山は江南宣州溧水県の東南にある山の名。「覆簣」は微少なものを積み上げていずれ山を為す喩え。

続いて『桂苑筆耕集』の自序は、高駢の幕下にあった四年間に、書記として代作した軍書等が「萬有餘首」もあったものを、「之を淘し之を汰し、十に一二も無」く精選して『桂苑筆耕集』二十巻にまとめ上げたものだという。

以上の詩文集編纂の経過を見る時、後世の我々は、『桂苑筆耕集』編纂時に淘汰された十倍の詩文やそれ以前にまとめられた詩文の散佚を惜しむのであるが、その一方で、新羅国王に上程されたとされる『桂苑筆耕集』二十巻が伝存する事実は誠に喜ばしい。特に上に引用した『桂苑筆耕集』の自序文は、崔致遠が自ら文集編纂の経緯を語った第一次資料として重要である。彼が十二歳で唐に渡った経緯や在唐生活の大要がここには赤裸々に証言されているからである。本稿で多くの紙幅を費やした顧雲との交遊についての資料も、『桂苑筆耕集』から多くの示唆を得ることができた。また、後世の編纂であるが、『三国史記』『破閑集』『孤雲先生続集』等に輯録する顧雲との交遊を示す詩文の多くが、一方の顧雲側には残されていないことも判明した。今更のことではあるが、記録を残すという行為が、時空を超えて後世に如何に裨益するかを、崔致遠をめぐる諸資料は雄弁に物語ってくれる。敬虔な宗教行為としての円仁の『入唐求法巡礼行記』も偶々確かな同時代記録として伝存し、崔致遠の渡唐時の情況の理解に大いに役立った。本稿と直接の関係は無いが、やや時代が早い白居易や菅原道真の生涯の履歴が今日かなり詳細に解明されているのは、実に『白氏文集』や『菅家文草』『菅家後草』あってのことであるし、他方、李白や王維とも親交があった阿部仲麿（晁衡）に自編の詩文集が残されていたとしたら、その事跡や評価は更に詳細で具体的なものになっていたに違いない。

白居易の『白氏文集』は詩文集を後世に伝えたいという作者の強い意図が働いて、幸いにその多くが今日に伝わるという幸運に結びついたが、崔致遠の『桂苑筆耕集』は、その編纂の直接の契機は、時の国王に上程した自らの留学報告、つまり就職活動であったらしく思われる。従って、その時点で、さほど重要でないと判断された詩文が、「之を淘し之を汰し、十に一二も無い」までに精選され、棄てられたのは、惜しみて余りあることではあるが、それにしても、作者自編になる韓国人最初の別集がほぼ完璧なまま今日に伝えられる幸運を、後世の我々は素直に慶賀すべきであろう。資料の多量の散逸が懸念される晩唐詩人の研究において、小稿で論述したように、中国では早に失われた羅隠や顧雲の詩人活動の一端が、崔致遠との交遊の側面から照射されたことはその慶事の一である。

注

(1)「孤雲先生事蹟」所収「家乗」。

(2) 日本では今西龍「新羅崔致遠伝」(『新羅史研究』所収。京城・近沢書店、昭和八年)、周藤吉之「新羅末の文士崔致遠伝—とくに同年進士の友顧雲の事蹟について」「唐末淮南高駢の藩鎮体制と黄巣徒党との関係について—新羅末の崔致遠の著『桂苑筆耕集』を中心として—」(いずれも『宋・高麗制度史研究』所収。汲古書院、一九九二年)等の先行論文がある。また、台湾・謝海平『唐代詩人与在華外国人之文字交』(文史哲出版社、一九八一年)にも言及がある。小稿のテーマに関わる論文として、許捲洙「崔致遠の在唐生涯に対する小考」(『中国語文学』十、嶺南中国語文学会、一九八五年。原文はハングル文)を参照。なお、韓国における崔致遠研究については、濱田耕作教授(九州大学・朝鮮史学)を通じて関係論文目録を提示されたが、ハングルに不如意な筆者は研究動向の把握が十分でない憾みがあり、関係者のご教示を願う。

(3)『全唐詩』(中華書局、一九六〇年)第二十五冊に市河世寧『全唐詩逸』が補刻され、『全唐詩外編』(中華書局、一九八二年)巻二十、および『全唐詩補編』(中華書局、一九九二年)に崔致遠詩が補録される。このうち陳尚君輯校の『全唐詩補編』所収「全唐詩続拾」巻三十四には、小稿に密接に関係する顧雲の崔致遠送別詩を輯録する。なお、『桂苑筆

耕集』伝本の経緯については、萬曼『唐集叙録』（中華書局、一九八〇年）一三五頁「桂苑筆耕」を参照。

（4）高麗仁宗二三年（一一四五）成立。

（5）『崔文昌侯全集』（成均館大学校大東文化研究院影印、一九七二年）所収。

（6）亜細亜文化社、二〇〇一年三月。

（7）新羅人の賓貢進士。『太平広記』巻五十三に大中十一（八五七）年の上表文に言及する。因みに八五七年は崔致遠の生年であり、崔致遠にとって、金可記は唐朝で活躍中の郷土出身の大先輩となる。後に崔致遠も賓貢進士を授けられることは後述するが、崔致遠やその父を含む関係者にとって、金可記（或いはその他の同様の履歴を有する先輩）は憧れの目標であったであろう。金可記は金可紀とも記する。

（8）詳細な訳注書に小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』（四冊、鈴木学術財団、昭和三九年）、研究書にE・O・ライシャワー著、田村完誓訳『円仁唐代中国への旅』（原書房、一九八四年、また実業之日本社、一九六三年、及び講談社学術文庫、一九九九年）があり、深谷憲一訳を中公文庫、一九九〇年に収める。更に点校本に『入唐求法巡礼行記』（顧承甫等点校、上海古籍出版社、一九八六年）、校註本に白化文等『入唐求法巡礼行記校註』（花山文芸出版社、一九九二年）等がある。

（9）陝西人民出版社、一九八九年。

（10）社会科学文献出版社、一九九八年。

（11）遼寧民族出版社、一九九二年。

（12）裴瑾は、崔致遠が受験した科挙試験の主任試験官（座主）の再従弟。同書冒頭に「右件人、是某座主侍郎再従弟」の語がある。

（13）興膳宏訳による。『陶淵明・文心雕龍』（世界古典文学全集二五、筑摩書房、昭和四三年）。

（14）中華書局、一九八三年。

（15）『羅隠集』雍文華校によれば、「才多」は一本に「窮多」また「窮途」に作る。

（16）清・劉世珩輯、民国九年（一一二〇）刊。

（17）陳尚君輯校、中華書局、一九九二年。

（18）『桂苑筆耕集』巻十七所収。

（19）羅隠に「送顧雲下第」詩（『全唐詩』巻六六三）、および鄭谷に「同志顧雲下第出京偶有寄勉」詩（『全唐詩』巻六七六）がある。

（20）「支使」は『孤雲先生文集』巻一に「友使」に作るのは誤り。『新唐書』巻四十九下、百官志四下に、節度使の属官として「支使」の名が見える。顧雲は崔致遠と共に淮南節度使高駢の幕下にあった。

（21）崔致遠の字とされる「海雲」また「海夫」についても、崔致遠の渡唐に伴う渡海行為と密接に関連するのではないか。即ち『孤雲先生文集』巻一所収の次の「泛海」詩は、詩作の具体背景は定かではないが、詩題や詩内容からすると、崔致遠が実際に海上で、或いは新羅への帰国途上の海上で構想されたものかと思われる。

掛席浮滄海　席（むしろ）を掛け　滄海に浮かべば
長風萬里通　長風　万里に通ず
乘槎思漢使　槎に乗りては　漢使を思ひ
採藥憶秦童　薬を採りては　秦童を憶ふ
日月無何外　日月は無何（有）の外
乾坤太極中　乾坤は太極の中にあり
蓬萊看咫尺　蓬萊を咫尺のうちに看れば
吾且訪仙翁　吾は且らく仙翁を訪はん

（22）岡村繁『白氏文集』四（明治書院、平成二年）参照。

（※）本稿は、平成13～14年度九州大学P&P「崔致遠撰『桂苑筆耕集』に関する総合的研究」（代表：濱田耕策人文科学研究院教授）に参加して得られた研究成果の一部である。